

国際統計協会第32回総会開会式

皇太子殿下のおことば

このたび国際機関および諸外国から多数の統計の専門家をお招きして、国際統計協会の第32回の総会を東京で開催することになったことは、私の非常な喜びとするところであります。特に今年は協会が設立されて75周年の記念すべき年にあたっているのは、開催国の日本として一そう意義深く感じます。

統計によれば、世界の人口は28億を越えているということですが、これらの人々が生活の向上を図りながら、善良な隣人として互いに平和な暮らしを享受して行くためには、正しい統計による明るい政治が行なわれる必要があると思います。

また、その統計は国際的に比較することができ、しかも誰でも容易に入手できるものであることが必要であります。

世界のすぐれた統計家が一堂に集ってアカデミックにこれらの問題を討議することは、ただに統計の進歩発展に寄与するだけでなく、国と国がお互いの理解を深めるために大きな貢献をするものと信じます。

短い期間ですが、参加者各位の協力によつてこの総会が立派な成果を挙げられるよう希望します。



内閣総理大臣あいさつ

国際統計協会の創立第75周年の記念すべき年にあたり、第32回総会を日本にお招きして開催することができましたことは、私の心から喜びとするところであります。

世界の国々から、このように多数の方々の御参加をえまして、この総会を盛大に行なうことができますことは、主催国といたしましてよろこびこれに過ぐるものがございません。ここに心をこめて歓迎の意を表しますとともに、この総会の開催のために、あらゆる部面にわたつて御尽力下さいました会長ボルドリーニ閣下、事務総長グツワーツ氏、事務局長ルーネンベルグ氏および財務理事コックス女史等協会役員各位の御熱意と御努力とに対し、ここに深甚の謝意を表する次第であります。

1853年以来、ケトレーの提唱により1年おきに国際統計会議が開かれてきたのでありますが、日本の代表が始めてこの会議に出席いたしましたのは実に88年前の1872年のことであります。また1885年に国際統計協会が設立されました後におきましては、1899年にクリスチヤニアで開かれました第7回総会に、柳沢伯爵が日本政府を代表して出席されて以来、ほとんど毎回日本から代表が出席いたしまして、国際統計協会の活動を通じての統計の国際協力に積極的に参加いたしているのであります。

1930年9月には、第19回総会が日本において初めて開催せられました。そのことは、皆様も御承知のところと存じますが、おそらくただ今ここに御臨席の皆様のうち何人かの方は、当時少壮有為の統計家として会議に参加されていた

であろうと思います。

それから30年の歳月が流れ、世界の国々にも、また日本にも、大きな変革がもたらされましたが、とくにこの間における、科学の進歩発達は、30年前には全く想像もできなかったほど大きかったのであります。そして統計ならびに統計的手法が、その科学の進歩発達と、社会の発展進化に対して、貢献するところがきわめて大きかったことは、今さら申し述べる必要もないことと存じます。

いまや、統計の作成、その利用と、統計的手法の応用等は、技術革新の時代といわれる今日におきまして、いよいよその重要性を増してきているように思われます。したがって、これらについて、今後国際的協力が、いよいよその必要性の度を加えるであろうということは、疑いのないところであります。国際統計協会の存在、ならびにその活動の意義は、正にここにありと考えます。そして本日から10日間にわたって行なわれます総会の議事の内容もまた、協会のもつこれらの意義の重要性をはつきりと示しているものであります。

私はここに、歴史と伝統とに輝く、国際統計協会が設立75周年を迎えられたことをお祝い申し上げますとともに、国際統計協会が今後ますますその事業を通じて、国と国、国民と国民の間の理解と信頼とを深めるために貢献されるようお願いいたします。

最後に、皆様の日本御滞在が皆様にとつても寒くゆたかであるとともに、楽しく、そして、こころよいものであるようお願いいたしつつ、私の歓迎のことばを終わります。

会長ボルドリーニ氏あいさつ

今回の国際統計協会総会には皇太子殿下の御統裁を戴き、又本日は開会式に御臨席を得ましてまことに光榮に存じます。会員一同を代表して深甚なる感謝の意を表します。

協会創立75周年を記念する本日の式典の荘厳さと意義は、洵に深いものがあります。

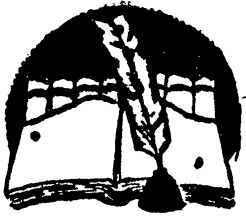
統計学は、近代科学のあらゆる分野のうちでも、最も技術的、実証的なものと思われれます。日本は、今世紀までに科学・技術の面においてこのように非常に優れた位置に到達いたしました。その独自の文化は芸術と詩から由来するものであります。それでは、この偉大な国のわれわれに対する関心は何によるものでしょうか。

私はかの最も有名な近代科学者、アルベルト・アインシュタインによつてしばしば述べられたある思想を思い返したいのです。科学は、事実を純粋に記述したり、解釈したりするということとは別に、元來人間の知力の自由な創造、即ち論理的実際的な必要性のために我々が外界に対して作る知力組織なのであります。したがって、殿下、閣下、日本の当局の方々、並びに学者諸氏の我々の科学的研究に対する御関心の程は容易に理解できるのであります。

ここにお集りの方々は、誰も、我々西欧人自身と同じように本日の式典において、科学と空想、知力と心、自然と詩事実と精神との調和を求めようとしているのであります。

国勢調査みんなで知ろうみんなの姿

親も子も孫も調査の仲間入り



— ISI 総会の回顧 —

国際統計会議は終る

行政管理庁基準局長 後藤正夫

京都府知事の蛭川虎三氏は、統計で経済学博士の学位をとった学者知事として知られている。その蛭川知事が国際統計会議に出席した異国の統計家60名を天童寺に招いて、懐石料理で旅情を慰めたときのことである。知事が「ここではしばらく統計を忘れて、おくつろぎいただきたい」というと、頑固で気むづかしやで知られているイギリスのローナルド・フィツシャー卿が「私は一瞬も統計を忘れることができない」と答えた。それを側で聞いていた I・S・I 会長のイタリアのボルドリーニ教授が「せつかく知事があのように言われるのだから、5分間だけ統計をお忘れ下さらないか」とフィツシャー卿をなだめた。

フィツシャー卿とくらべれば、程度の差はあつても、このたびの会議のために日本にきた、180名の統計家の多くは、統計に半世または、終世を捧げてきた著名な人たちであつた。そのような一流の人物が一度にとつと来日したのだから、わが国の統計界、数学界は、まさに ISI ブームをまきおこした。国際会議場の中ばかりでなく産経ホールの食堂でも、ホテルのロビーでも、また、観光旅行の車中でも、統計の議論が沸騰し、統計が世界共通の言葉であることを目のあたりにするような光景をいたるところにみせていた。

会議は5月30日の夕方から、明治記念館で行われた運営本部長、益谷國務大臣主催のレセプションで幕をあげたが、世界各国から集まった統計家がまずここに顔を合わせて、日本人参加者 150名とともに尽きない歓談に時のたつのを忘れた。次いで、翌31日午前10時から、会議を統裁された皇太子殿下の御臨席のもとに、KHKホールにおいて開会式を挙行了した。

NHK交響楽団の演奏する越天楽の序奏を終つて開会が宣言されると、皇太子殿下が立たれて歓迎のお言葉を述べられたが、それは遠来の客に極東の日本で行われた会議にふさわしい強い印象を与えたようだつた。続いて岸総理大臣・東、東京都知事および国際統計協会会長ボルドリーニ教授の挨拶、叙勲報告、音楽演奏の順で式典が進められたが、その模様はNHKのテレビ放送網によつて全国に放送された。

戦後、わが国で行われた国際会議の開会式のうちに最も荘厳であつたことを多数の国際会議に関係したベテランが語っていたほど ISI 総会の開会式は厳粛に行われた。

次いで、会場を産経会館に移し、同日午後、国際統計協会通常総会を行い、翌6月1日から9日の正午まで国際ホールその他の会議場で、20の部門についての学術的な会議とその分科会が開かれ、さらに九段会館では公開の講演会も行われた。その間、地方視察を兼ねて神奈川県知事の招待による旅行とレセプション、東京都知事の招待による都内観光とレセプション、日光観光と栃木県知事のレセプション、日本科学技術連盟の招待による歌舞伎観劇、東京商工会議所の提供による珠算の実演等、多彩な行事があつた。そして6月8日には、皇太子殿下ならびに皇太子妃殿下の御臨席のもとに、帝国ホテルにおいて岸総理大臣主催の晩餐会が行われて、会議の最後を飾つた。閉会后、有志60名が団体に関西に旅行したが京都では知事、市長、商工会議所会頭、奈良では知事、大阪では知事市長の心からなる歓待をうけた。

会議の出席者は45カ国と国連ならびにその機関から184名、同伴家族41名を加えれば225名に達し、これに日

本人140名（他に傍聴者200名）が加わった。それらの中には、アメリカ合衆国の50名を筆頭にフランス13名、イタリア11名、オランダ、イギリス、インド各6名というように多数の代表が出席した国があり、ソ連邦ならびにソ連圏の国々からも10名の代表が出席していた。

会議の議題は、ノースカロライナ大学統計研究所長のゲトルート・コックス女史を中心とする、ISI本部のプログラム委員会が20のテーマを定め、それぞれ部会を設けて、部会長を指名していたが、その委員会には国際統計協会副会長の1人である森田優三博士が委員として参画した。なお、これら20の部会のうち、経済成長と資本形成の部会長に森田優三博士、生物統計学会との共同による医学研究のための統計的方法の部会長に増山元三郎博士と、三つの部会長を日本の学者がつとめた。この三つの部会は、いずれも時代の脚光を浴びている問題を扱っているだけに、会場は特に多数の聴衆で賑わった。

今回の会議の準備は、すでに2年前から進められていた。そして閣議決定によつて設けられた運営本部の仕事は、行政管理庁統計基準局と総理府統計局が終始協力して行つた。

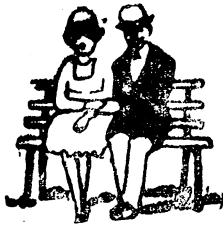
しかし、昭和5年に行われた第19回国際統計会議のときにくらべて外国からの出席者が3倍近いにもかかわらず、今回の会議の予算は現在の貨幣価値に換算して比較すれば、当時の3分の1程度に過ぎないから、決して充分な額とはいえなかつた。そして、今回の3,250万円の予算のうち政府予算500万円を除いては、地方公共団体、

民間団体、あるいは会社等からの寄付金であつたから、予算を有効に使うために、関係者の払つた努力は並ならぬものがあつた。

すでに、来日した統計課の大部分は帰国した。それらの人々には日本の総合とその関連行事ならびに日本人の歓待に満足していたように見受けられる。会議が予定どおり進行し、一つのトラブルもおきず、1人の病人も出ず、しかも、全期間を通じて雨にも降られなかつたことは誠に幸せであつたといえよう。

日本を去る日のフィツシヤー卿は、歌でも口ずさむのではないかと思うほどのごきげんで、じょうだんばかり言つていた。「日本の会議はよかつた。日本の景色は美しかつた。日本の食べものはうまかつた。日本人は親切だつた。日本のコーヒーはおいしい。もう一杯のんでおきたい。」としゃべり続けながら、空航のロビーでコーヒーを飲んだ。フィツシヤー卿がいつもかぶっている帽子がないのに気付いて「帽子はどうされたのか」ときくと、老先生はしばらく考えていたが、やがてこう答えた。「実はどこかに帽子を置き忘れてきた。しかし、日本のすべてのことがたのしかつたし、日本人が親切だつたので、私が帽子をなくしたことをしゃべつて日本の友人たちを心配させたくないと思つて、言わずに日本を立つつもりでいたのだが」そういつて愉快そうに笑うその日のフィツシヤー卿は、統計を忘れていたやさしい老人としか見られなかつた。





日本にいる外国人

昭和35年国勢調査で調査するのは、昭和35年10月1日に国内に住んでいる人の全部です。日本人はもちろん外国人もすべて調査します。

アメリカ人

Wさんはアメリカ南部の州の生れである。その州の大学を出て宣教師となり、戦後日本にやつて来た。新教だから美しい奥さんを同伴して来たが、奥さんは同じ大学の学生であつたそうだ。はじめ東京に住んでいたが、東京があまりに大きすぎて騒々しいので、敬遠して地方都市に移つて来た。

Wさんには兄弟が多い。10人以上いるらしい。これは私の勘で、統計によるものでないから、そうだと断定できないが、どうも日本にやつて来る欧米人は、家族が多いんぢやないかという気がする。だから、1人や2人どうなつたつてかまわないというわけでもあるまいが、こんな日本にまではるばるやつて来るのだらう。実際はキリスト教の伝道の使命は、どんどん未知の世界に出掛けていつて布教することにあつて、つまりそれが宣教師の役割なのだが――。

Wさんの日本における生活は、まず中流どころの生活だろうと思う。教団から給料を貰つているが、私の見せてもらった給料証明書によると、そんなに大した額でないのに、実際の生活は中々ぜい沢である。教団のものらしいが、乗用車を持っており、教会への行き帰りは、奥さんと交代で運転する。

住んでいる家は、これもおそらく教団の所有なのだろうが、ちよつと私たちがうらやむ文化住宅で、庭は一面の芝生である。日本人の夫婦が雇われておりコックとメイドをやつている。着ているものはやや質素だが、しかしこれも、洋服は元来彼等の着物であり、洋服ばかりが良くて、他の生活のみみつきい日本のサラリーマンよりはづつと身につけている。

Wさんの日常生活は、勿論彼は宣教師なのだから、日々神にお仕えすることにある。しかし神に仕えるという生活は、Wさんにとってはそんなにきびしい精神生活でもないらしい。1度Wさんの家に招待された時に、Wさんが日本各地を旅行した時のカラー写真を幻灯で見せてもらったが、私がひがみつばい貧乏根性のせい、随分遊び歩いているんだなあという感じをいただいた。

クリスチャンと交際のある人は経験があるだろうが、

彼等が食事をする時は神にお祈りする。食事の時だけでなく機会あるたびに神に感謝する。私はWさんの生活を見ていて、こんな生活なら誰だつて神に感謝するだろうと思つたものである。

Wさんの話だと、日本という国はキリスト教の布教しにくい国だそう。朝鮮の方がはるかに布教し易い。なぜだか分らないが――。

先日朝日新聞に投書が載つていたが、日本に来ている宣教師の多くが我々よりずっと良い生活をしているのでその説教に中々ついて行けないとあつた。

外国人を理解するのは中々困難である。その第1の理由は言葉にあると思う。それに民族が違うとやはり人は理解しにくいのではないか。同じ日本人でも、人を理解するのは随分と困難だから。

Wさんが神の道に入つた動機は聞かなかつた。ただこんな話を聞いた。Wさんの住んでいた州で、彼の子供の頃、非常な飢饉があつたそうである。家族が多くて食べる物にも困つたが、その時でも日曜日には必ず教会に家族中が出掛けて行つてお祈りをした。今は皆んなが幸福である。

その為Wさんが神の道に入つたわけでもあるまいがしかしWさんには、人がお祈りをしている時に、あくびをしても平気であるところがあつた。日本人は大体教会をあまり真剣に考えすぎるのかも知れない。

Wさんは、おそらくこの地方都市に永住するつもりなのだろうと思う。アメリカ人としての誇りを捨てないで――。そしてWさんという外国人にとつて日本はきつと住みよいのだろうと思う。

ポルトガル人

ポルトガル人は日本人に似ていると1度聞いたことがある。私が東京で出会つたポルトガル人も日本人と見違ふ程似ていた。背も我々と同じ位だが、ただ欧米人の場合は丈がなくても、身体つきはガツチリしている。

東京で出会つたポルトガル人の名前は、何遍も聞いたのだが、その時私が酔つていて忘れたのでかりにYさんとしておこう。

Yさんが日本に来ている理由は、ポルトガル本国では

食えないからだそうだ。彼にも兄弟が多くて、香港とマニラ、ブラジルとサンフランシスコにそれぞれ住んでおり、彼は両親やその他の兄弟と一緒に日本にきた。父親の職業はブドウ酒の貿易とかで、Yさん自身は保険会社に勤めている。

Yさんの人生にとって、三つの楽しみは、音楽と酒と食べる事だ。さすがに初対面の私には女だとは言わなかった。彼は毎日静かなバーを捜して飲む。ハシゴ酒はやらないで、1軒でハイボールを必ず10杯飲んでやめる。あまり遅く帰ると母親が起きていて心配する。「母親？」と私が聞いたら、彼は34才だがまだ妻がないのだと聞いた。

Yさんは相当な歌い手であった。ギターが上手く、日本人にも教えているのだそうだ。日本はたいへん音楽的な国だから好きだといったが、誰もそんなことを言ったような気がする。

Yさんは将来ブラジルに永住したい意向を持っているが、こうなると、彼等はまさに世界をまたにかけて生活しているようだ。彼は近く香港に行くのだといったが、私たちから見れば、ちよつと香港に行くにしたつて、まず旅費のことが心配になるし、第一海外に出るのに目的もなしでは許可が得られないだろう。

Yさんは英語も話せるし、フランス語も話せるが、そんなことは欧米人には普通で、彼がどの程度の学問を持

っているのかは知らない。話していることは、歌と酒でまるでアンチヤンと変りないのに、ポルトガルに帰つても食つて行けるだけの職がないという理由だけで、日本くんだりまでやつて来て、そこで結構ぜい沢な生活ができるとは、日本という国は欧米人には甘いのか。それとも日本までやつてくる外国人は、これはもうせせこましい本国などという観念からは抜け出た、いわゆる国際人なのか、人の生き方にも色々あると考えさせられる。

韓 国 人

昔、私の通つた小学校には1クラスに必ず1人か2人の朝鮮人（その頃はそう呼んだ）がいた。彼等のうち男はきまつてけんかが強くて、駄足が早くてもうが強かつた。だが彼等の家庭はたいへん貧しかつたように思う。そして、中学校へ上がる子供はほとんどなかつたがたまにいても、今度は中学校の方で減多に採用しなかつた。彼等の日本での生活は決して幸福ではなかつたろう。昭和30年の国勢調査で、日本に住んでいる外国人の数が別表のように出ているが、そのほとんどが韓国人である。

彼等は日本をどう考えているのだろうか。それよりも日本人自身が、日本という国をどう考えて生活しているのだろうかとは私は時々考える。

別 表 国 籍 別 人 口 (昭和30年国調)

国	籍	全	国	茨	城	県
外	国	人	総	数	597,438	5,137
韓	国	ま	た	は	朝	鮮
中					40,500	161
ア	メ	リ	カ		7,858	43
イ	ギ	リ	ス		1,329	0
カ		ナ	ダ		955	0
ド		イ	ツ		1,077	3
フ		ラ	ン		539	1
そ		の	他		5,543	8
不			詳		2	0

この調査明るい日本を生む力

新市町村の横顔

筑波郡 大穂町



吉村町長

1. 概況

この町は筑波郡の中央部よりやや北に位し、東は新治郡桜村南は谷田部町と豊里町、西は小貝川を隔てて結城郡千代川村に接している。土浦から南筑波線古河行の国鉄バスに乗ると約40分で役場前に着く。役場は赤瓦クリーム色の2階建て、広々とした知地に美しい。昨年9月工

費700万円で新築したもので、郡内一だにご自慢である。

明治22年町村制実施の際、当時の大字を合せて大穂村が出来たのであるが、当時、大曾根という部落が一番大きい字であるところから大をとり、次いで大きい方穂〔カタホ〕の郷（現在の玉取）の穂をとって大穂と名づけられた。明治28年町村制施行により大穂町となり、栗原村大字蓮沼地区を編入合併し、昭和30年4月には筑波郡旭村大字要を合体合併、更に31年には吉沼村の一部を編入合併して現在に至っている。

町の面積は34.86km²、世帯数2,194、人口11,989人、(男5,819人、女6,170人)―35年4月末一で、規模としては中程の純農村である。町の交通網としては上記のバス路線の外に、筑波・谷田部間、筑波・水海道間の常総筑波バスが町内を走り、更に下妻、牛久間の三ツ矢観光バスが吉沼地区を走る。

2. 産 業

今年2月に行つた世界農林業センサスによると、町の農家数は1,713で、これは全世帯の約8割である。耕地面積は昭和34年8月の夏期農業基本調査によると田約500ヘクタール、畑約1,000ヘクタール、樹園地約70ヘクタール、外に山林が約500ヘクタールある。主要農産物は米、麦、小麦、陸稲であるが、一寸変わったところで、特産物のホウキがある。これは小麦を刈つた後に種をまき、穂が出てその穂を刈り取るまで60日という短時日のところがうまみである。10アールあたり75kg(20貫)の収穫で、1万2,3千円に売れる。町にあるホウキ加工業者は27軒、約26万本のホウキを作り3千万円からの生産額をあげている。この町にホウキ草の栽培が多いのは、ホウキ草で有名な栃木県鹿沼から移住して来た人が始めたからだといわれており、最近まで取引は専ら鹿沼であった。

ホウキ草と煙草の終つたあとの約150ヘクタールには

白菜が作られる。白菜は隣村の桜村が有名だが、最近この町でも盛んに作られるようになった。10アールあたり1万円の平均収入だそうだが、純利益はその半分位か。かんしょは殆どつかせいに代り、作付は120ヘクタールトマト、西瓜も多い。

酪農はこの町でも盛んで、乳牛は約70頭、土浦で集乳される。豚も最近は多くなつた。

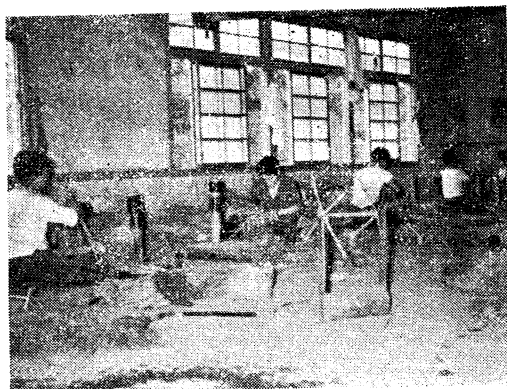
3. 教育文化

町の旧大穂地区に町立の保育所(収容人員65人)と幼稚園(同100人)があり、吉沼地区には私立の保育所(同58人)がある。子供の送り迎えを町の大型スクールバスでやつているのが特色だ。保育所は昼食持参で、3時頃まで昼寝をさせておく。高校への進学者は40人位で、中学卒の8、9割は東京に就職してしまう。

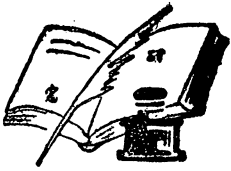
最近部落には若いものがいなくなつたという話だ。(試みに昭和31年12月31日の町の人口は12,400人、同34年12月31日の人口は12,057人である)それでも今年3月に農村青年のための研修所が吉沼地区に完成した。建坪約300m²、工費321万円で、種々の研修に利用されている。

今部落では蚊とハエのいない運動が盛んだ。部落単位に月3回薬を散布し、効果てきめん、農家でも蚊帳をつらないで寝られるようになったというから大したものである。負担は1戸月190円程度だという。

この町は新町になつてから、比較的動きが少なくなつたようだが、それも豊かな農地に恵まれ、大様な町民性と相まつてのことと考えられ、今後の発展が心から期待される。



ホウキ工場



〔随筆〕

数字という魔物

世の中のことは、数学的計算のとおり「 $2+2=4$ 」とばかりはならないことが多いようである。ことに社会が複雑化し、四六時中、もやもやとした煙霞の巷に迷い込んだような現今においては、いろいろと厄介な、そして面倒なことが余りにも多く、常識では割り切れないような状態にある。

尽きるを知らない科学の発達による、宇宙時代においては、生きるために精一杯のちつぽけな、抵抗の毎日を社会の片隅に繰り返しているような個人の存在などは、余りにもはかないものに覆ってしまう。

私達統計人が毎日取り組んでいる数字も、このような複雑怪奇な社会現象の中では、随分とゆがめられ、良識のある人達は、そのような数字を取り扱うことに、はなはだしい自己嫌悪を憶えることがなきにしもあらずである。

大戦末から終戦にかけて、長く続いた統制経済時代に培われた、何か本当のことが語れないという感情は、潜在的に個人の脳裏に焼きついて、それが時に統計に顔を出すことがある。正しい統計によつてこそ、正しい生活の基盤がきづかれ、向上した人間生活が策定されることになるようにも認識されるようになった今日においてさえもである。

統計の中でも、特に経済社会を背景にして行われる経済統計の場合に、直接個人の生活問題などが関係して、どうしても数字がゆがめられることが多かつた。しかし直接経済社会につながりの薄い、したがつて弊害も少ない教育統計とか、人口統計とかの調査でも、その数字により、いろいろ考えさせられる問題が隠されているかも知れない。実際にこれらの統計を作る人が、これらの統計によつて少しでも自己に有利のものを作りたいと思ひ、

例えば、生徒の人数を殖やして、学級数の増加、ひいては教師の定員増などと考えたりすることがあつたとしたら、それはまことに言語同断ということになる。多分そんなことはないだろうと思うが。

又、こんど教育統計を担当してみようと思うのだが、私は算術で（算術などの言葉を使うとお歳が知れるが） $2+2=4$ と教えられてきたものだが、現在の算数的計算では、 $2+2=5$ あるいは3となつてくるような統計が、往々にして見受けられ、先生の算数的手腕を信頼して、いざ集計してみるとこのような答が出て集計子を随分とあわてさせる。われわれ統計人から考えると、どうしてこんな数字になるのかと、思わず首をかしげざるを得ない。教える事と、実際に行うことはこんなにもむづかしいものなのであろう。

ここに統計の基礎的知識を涵養する統計教育の必要性が生じてくるのではなからうか。新しい時代に目覚めた子供達に、統計的なものの考え方を植え付け、次代には正しい統計による、明るい文化国家の建設を待望したいものである。

私の視野は至つて狭く、統計という仕事を通じて大いに我田引水的なことがあるかも知れない。しかし統計はかつての、統計のための統計調査から、使われる真実の統計が、現在の混迷した社会を導いていく指標となるべきではないかと考える。統計が一般の人達から認識され大いに愛されて「 $2+2=4$ 」になるか、それに近いような世の中となるようになってきたらと思考しているが、世の中のことはそう簡単に割り切れるものではないだろうから、ちよつと甘いと思われるかも知れないが、人生は大いに夢を持つて尊しとなすべきではないだろうか。

（B. T生）